慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都市と人物発生との関係
Sub Title	
Author	田中, 一貞
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.3 (1909. 10) ,p.243(13)- 262(32)
JaLC DOI	10.14991/001.19091001-0013
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19091001-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ものがまた問題となるに至つたのである（未完）

都市と人物發生との關係

田中一貞

余は嘗て本誌に於て「人物發生に對する自然界の勢力」なる論文を掲げて人物の發生は自然的の勢力例へば氣候風土地勢人種等に依りて左右せらるゝこと一般に想像せらるゝが如く然かく大なるものにあらずして寧ろ社會的勢力個人的努力は其最も有力なる原因なることを説けり。但し是は重に消極的に自然力の案外に有力ならざるとを述べたる迄にして積極的に人力の至大なるとを證せるものにあらざりき。故に余は本論に於て都市的生活と人物發生との關係を説き如何に社交は社會の智能を啓き個人の性格に貢獻する處大なるかを論せんと欲す、思ふにニユートン氏運動の第一法則「靜止の體は常に靜止に安んじ運動の體は常に等動を以て直線進行す」とは獨り物質界に於て眞理なるのみならず、社會上精神上亦此原則の行はれざるなく吾人の人格の如きも刺戟なき時は常に靜止の狀態に止

まり、如何に俊秀なる才力を具備するものと雖も四圍の勢力に淘冶せられずんば其天稟を發揮するによしなかるべし。而して事實上人間の精神に及ぼす勢力なる者には大別して二種ありと云ふを得べく、一は自然力一は人力なり。人力にも個人の勢力の外に間接に來る所の社會的勢力なるものあり、之は一時に個人の力にては左右すると能はざるものなれども其根本に於ては個人の勢力の相結んで醇化したるものなれば結局大體に於て人間の自動的勢力なり、米國社會學の大家ワード氏は社會力中最も重なるものとして人間の生殖力を算へたれども生殖は生物學又た生理學上の事實にして生殖力は隨て生物的又は生理上の勢力なるが故に眞正の社會的勢力は全然精神的のものにして個人の精神より他の個人の精神に壓力を加ふる所のものならざるべからず。言語宗教道德政治教育科學等は凡て此社會的勢力の結果なり。今此自然力と人力とが個人の上に活動する狀態を見るに社交の發達せず人爲の機關の整頓せず原始的生活に近き狀態に在るものは比較的に多量なる自然的勢力の影響を蒙むるべく、人口の密集し相互の交通頻繁なる都市に生活するものは人爲的勢力社會的勢力に浴する事多き理なり、故に人口稀薄なる地方と人口の集中し社交の發達せる都市とを比較し、其何れか人物を多數に發生するやを知るを得ば自ら人物發生に對する自然力と人力との比較的勢力を知るに足るべし。吾人は先に自然力に關しては既に論ずる所ありたるが更に此比較は自ら自然力の効果をも再び表明するものにして云はゞ二重の興味を有する問題なりと云はざるべからず。

人間の互に相交通し相競爭するは人智發展の重要なる原因なることは必すしも科學的研究を要せず常識を以ても判斷し得る所にして我邦の諺にも「三人集まれば文殊の智慧」と云ひ西洋にも Iron sharpenth iron ; so a man sharpeneth the counetnance of his friend と云ふ諺あり又社會學の鼻祖オーギユスト、コムトの如きも夙に之を說き「吾人々類の密度の增加は少數の人物のみにては不可能なる分業をして益々專業的ならしめ且個人を刺戟して進步の途に就かしめ社會を刺戟して其有力にして整頓せる勢力を以て其分離の傾向に反抗せしめ以て直接に社會進步の速力を大ならしむ云々」と云ひスペンサーの如きも亦「過去現在未來に通じて人間相互の壓力は社會進步の誘導者なり」と說き更に佛國ボルドー大學の教授にして有名

なる社會學者ジユルケーム氏は其著「社會的分業」(デユ、ラ、ジビヨン、デユ、トラヴアイユ、ソシアル)に於て「分業の度は社會の大さと密度に正比し、若し分業が社會の發展に連れて絶えず進歩すとすれば、夫は社會が絶えず稠密になり且常に膨脹するが爲なり」と論斷し其後彼は更に動的(ダイナミック)密度と物質的密度との差別を立てて再び之を詳論したり曰く「重大なる社會進歩の根本的原因は社會內部の組織に於て求められざるべからず、而して此條件に適ふ所の二個の性質あり、一は社會單位の數にして換言すれば社會の量なり、一は人民集合の度にして吾人の動的密度と稱するものなり。此動的密度とは純然たる人口近接の意義にあらず、何となれば其近接する個人若くは寧ろ個人の群が互に精神的に離隔し居る時は何等の結果をも生ぜざるべきを以てなり。然らば此動的密度とは何を指すやと云ふに只是れ精神的の觸接に外ならずして彼物質的觸接の如きは只之を輔助するに過ぎず、又全く精神的觸接の結果なる事も尠からず……而して其物質的密度と云ふは單に一定の平面に於ける人口の多少を指すのみならず、又交通及運搬の方法の發展をも含めるものにして一般に動的密度と同一の步調を以て進步し、大體に於て其尺度として見るべきものなり。何となれば人民の諸

部分が互に接近せんとすれば彼等は先づ其道を開かざるべからず。而して他の一方に於ては相互間の距離が彼等に障礙とならず、又は障礙が事實上除去せられたる時にのみ相互間の關係を生じ得べければなり、然れども是には多くの除外例ありて若し吾人が常に物質的密度に依りて社會の精神的集中の度を判斷せんとせば時に重大なる誤謬に陷ることあるべし云々」と。

此問題に就て論じたる學者は此外にも其數少からずと雖も、佛國のジヤコビー氏及オーダン氏が統計的に之を說明せんとしたるは最も注目すべきものなり。千八百七十四年マドリッドに於ける王立醫學々士會院に於て人間の淘汰と遺傳との關係を以て研究問題となせるに佛國のポール、ジヤコビー(Paul Jacoby)氏は此點に關し一書を著して詳論する所あり其結果同學士會院の外員に選ばれたり。其著は「遺傳との關係より見たる人間淘汰論」(Etudes sur la sélection dans ses rapports avec l'hérédité chez l'homme)にして其第一篇は勢力論第二篇は才能論なり。才能論の第四章に多數名士の姓名を其出生地に依りて排列し以て人口の密度は人才產出の重要なる原因なることを示さんとせるものなり。彼れの擧げたる名士は十八世紀に於

ける佛國人にして其數三百三十一人、千八百三十六年の佛國のセンサスを基礎とせるものなり。此の如くして彼は大體に於て人口の密度と人物の發生とは正比するものなることを發見せりとて論じて曰ふ「廣義に於ける文明卽ち人民の智力的道德的性質、社會的政治的科學的生活の一定の條件の複合體としての文明は多少界限せられたる地上に於る人口簇集の結果なりとは吾人の到達し得たる結論なり。是は社會的生活が日々複雜になり益激烈なる智力的活動を要求するに至れる結果なると同時に、既に形成せられたる人口の集中地は活氣あり智力ある人民を誘引して其生地を棄てしめたるに依る、是等の吸收力は人口集中地の數と共に增大し又文明の度と共に進步す、故に文明其者と人口の密度及人口集中地の數との間には因果的關係を有するものにして是等の二條件は積極的に文明の度を示し一國內諸地方に於ける文明の度を計量するの標準たることを得べし、彼は此の如き自信力を有せりと雖今其統計表なるものを見るに先づ其第一欄には佛國諸縣(デパルトマン)名をAB順に排列し、第二欄には十八世紀に於ける各縣出身の著名の士の人口十萬に對する比例數を記し、第三欄には各縣一キロメートル平方の平均人口を示し

第四欄には各縣全人口に對する各縣都市人口の百分比例を載せたり、ジヤコビート氏は自ら此統計に依て人口と人物との關係を發見し得たりとするも、吾人の見る所にては此表のみにては只朦朧と多少人口密集の地には多數の人物あるが如き形迹を認るのみにて、決して之を以て明確なる證據となし難きものあり。其セーヌ縣が一平方キロメートルの人口二千三百二十七人にして地方人口に對する都市人口の百分比例は九十八人、其出身人物の數は人口十萬に對して六十九人の多數なるは稍ジヤコビー氏の說を助くるに似たれども一方に於てコートドール縣が一平方キロメートル四十四人の密度にして都市人口の百分比例は僅に二十二人なるに其出身人物の數は人口十萬につき二十五人の比例を示し人才輩出の順番に於ては佛國諸縣中第五位を占むるに、他の一方に於てノール縣は人口の密度は百八十一、都市人口の割は五十五人の多數なるに其產出せる人物は僅々四人にして、諸縣中實に第七十二位を占むるが如きは其最も極端なるものにして、其他之に次で看過すべからざる除外例甚だ多く到底是よりして豫定の結論を引き難し。思ふにジヤコビー氏の統計が此の如く充分なる結果を與へざりしは表其者の調製

宜しきを得ざるに起因せるものゝ如し。卽ちジヤコビー氏は斯の如く繁雜にして効果少き方法を取らんよりは寧ろ直に大都市には幾何の人物を生じ小都邑には幾何、地方には幾何と計算し之を比較すべかりしなり。而して此方向に其調査を進め多大の好結果を得たるものをソフィア大學の敎授佛國人アルフレ、オーダン氏(Alfred Odin)とす。

オーダン氏は余が先に論じたる如く(本誌第一卷第五號參照)最も公平なる態度を以て人物發生と外界との關係を論じたる學者なり。統計家の缺點は云ふ迄もなく自己の豫定せる結論に達せんが爲に或は故意に或は無意識に自說に好都合なる材料のみを蒐集し、或は强て自說に合する樣之を排列し、此の如くして其數字を一種の詭辯を弄せしめ自ら欺き人を誤りて得々たるにあり。然るにオーダン氏の蒐集せる材料は廣く古今に亘り之を使用すること甚だ嚴正に凡て事物を表裏より觀察して事の眞相を洞察せんことを勉め、世の普通の統計家と大に選を異にするものあり。只惜むべきはオーダン氏の統計はジヤコビー氏の夫れの如く一般の人物を網羅せずして專ら文學者に限り科學者に及ばざりしことなり、然れど

もオーダン氏の材料を採れる範圍は實に十四世紀以降十九世紀迄の間にして、五世紀以前には今日の意義に於ける科學者なるもの極めて少數且無勢力なりしを以て今日迄其名の傳はりしもの甚だ少く、是が爲に科學者なるものゝ公平なる統計を得ること殆んど不可能の事に屬す。故に統計に應用せらるべき人物の種類を文學者の如き最近五世紀を通じて最も顯著なる階級に限りしは却て策を得たるものならんか。但しオーダン氏の稱して文學者と云ふは我邦の所謂文豪と云ふが如き意義を有するものにして必ずしも美文家のみを含めるものにあらず。其問題の如何に係らず凡べて後世に傳ふるに足るべき著述をなしたる人を指せるものにして中にはラプラス、ラマルク、キユヴィエの如き科學者をも包含し事實上凡ての佛國學者を網羅し居ると云ふも不可なきに似たり。彼れが此の如くして得たる人物の全數は六千三百八十二人にして是は始め蒐集したる一萬二三千人の中より選擇したるものなり。彼は之をmerit(秀才)と呼び次に此六千三百八十二人の中より更に顯著なるもの千百三十六人を選びて之をtalent(英才)と名づけ更に其中より百四十四人のgenius(天才)を選びたり。彼は先づ是等の人物の生地を調査して人

物發生と地勢氣候人種の如き自然力との間に何等か著しき連絡あるかを研究したれども何等の結論をも得ること能はざりき(本誌第二卷第五號參照)オーダン氏は更に宗教教育等の調査をなし進んで人口の密度と人物發生との關係をジヤコビー氏よりも一層精確なる方法を以て研究したり。

オーダン氏が如上の目的を以て編製したる表中最も重要なるもの二三を擧げん。先づ其内最も簡易なるは佛國諸州及ロー(フロヴアンス)レン、及瑞西の一部、白耳義の如き佛國感化の下に在る諸地方と其地に出生せる學者の數を擧げ之に其年數を添へたるものなり。

州 (Provinces)	都市		地方	
	秀才	英才	秀才	英才
Normandie	二五九	四六	一二五	二四
Picardie, Artois	二三八	三二	一二五	三三
Provence	二〇三	二八	八五	三二
Lyonnais	一四八	二六	一三	四
Lorraine	一四五	一九	八九	〇
Languedoc (南部)	一四〇	一九	四四	一一
Orléanais	一三七	二八	四七	一三
Bretagne	一三四	三〇	四〇	五
Guyenne (西部)	一二一	一八	四一	七
Touraine, Anjou, Maine	一二〇	一三	六九	一〇
Bourgogne	一二〇	二〇	五九	九
Suisse	一一九	一七	三五	九
Guyenne (東部)	一一七	一五	四五	一一
Champagne	一一六	一七	五二	一三
L'il de France (巴里を除く)	一一三	一三	一〇六	一一
Auvergne, Limousin, Marche	九八	一九	三二	八
Saintonge, Poitou	九八	一六	三八	四
Franche—Comté	九四	二一	八七	一三

Berry, Nivernais, Bourbonnais	七一	一七	二八	三
Savoie	六八	一九	五一	三
Belgique	五六	二	二四	一
Gascogne	三二	七	二三	七
Languedoc（北部）	一一	一	二六	四

（此表に於て示す所は學者の實數にして比例にあらず）

此表を一見すれば何づれの州に於ても人物を產出するの點に於ては都市が遙に地方に優ること火を睹るより明なり。只除外例とすべきは最後の北ランゲトックのみ。其他は都市は大抵地方の二倍以上の學者を生じたり。但フランシユコンテとイル、ド、フランスのみは都鄙學者の數大差なし。フランシユコンテに於て此の如き現象を生じたるは其原因不明なれどもイル、ド、フランスに於る其理由は其首都はヴエルサイユにして、其地方の部に計上されたるものゝ中には實際巴里の一部と云ふべきもの甚だ多きが爲なり、更に佛國を地勢に依り六大部に區分して之を見るも全然同一の結果を生ず。

部（Regions）	都市 秀才	都市 英才	地方 秀才	地方 英才
北部	五五三	八〇	二七四	五八
東北部	四七八	八七	二七〇	四〇
東南部	四二三	六七	二〇六	四九
北中部（巴里を除く）	三六五	六八	二〇五	三五
西北部	三五二	六八	一四七	一九
南中部	三一七	六二	八三	一五
西南部	二七〇	四〇	一〇九	二五

此の如く實數に據りて比較するも都市が地方よりも遙に多くの學者を生じたるを知るべく而して實際上都市人口は地方人口より遙に少きが故に之を人口との比例より見る時は此現象が一層明確に表示せらる。卽ち佛國の各縣に於ける人口十萬に對する學者の比例數に於て都市と地方とを比較すれば左の如し（オーダン氏は都市人口十萬人に付十三人以上の學者を生ぜる八十餘縣を擧げたれど

も此處には同百人以上を生じたる諸縣のみを掲ぐ）

縣 (Departments)	都市 學者數	都市 人口十萬に付	地方 學者數	地方 人口十萬に付
Saine	一三四四	二四三	一三	一五
Côte-d'or	九〇	二四三	三三	一一
Haute-Marne	二八	一八七	二四	一一
Oise	三九	一五六	三四	一〇
Doubs	五五	一四五	一八	一〇
Loiret	七一	一四二	二〇	八
Vaucluse	五一	一三四	二六	一七
Haute-Garonne	七八	一三二	一三	五
Cher	二七	一二三	四	二
Eure-et-Loir	三八	一一九	一九	八
Rhône	一三五	一一八	一三	七
Ille-et-Vilaine	六六	一一八	五	一
Indre-et-Loire	三六	一一二、五	一三	一〇
Isère	四二	一一一	一三	三
Hérault	六五	一〇八	一七	八
Loir-et-Cher	二八	一〇八	八	四
Calvados	八〇	一〇七	四五	一三
Aisne	三四	一〇六	三〇	八
Saine-et-Oise	五〇	一〇四	四五	一三
Meurthe-et-Moselle	四九	一〇二	一五	七
Marne	四七	一〇二	一三	五
Aube	三五	一〇〇	一七	九

（以上の諸表はオーダン氏の原表と排列上少しく異れり、是只研究上便利の爲め少しく順序を上下し繁雜を避けたるのみにして實質に於ては變化なしと知るべし）

此表に依り都市及地方の人口十萬に對する學者の比例を比較すれば非常なる

差異あると一目瞭然たるべく、殊にオーダン氏の原表に據り八十餘縣全體に就て之を比較するに都市學者の比例數は地方學者の比例數の十三倍にして前者は人口十萬に對して七十七人なるに後者は僅に六人に過ぎず。而して巴里が出産したる學者のみにて千三百四十一人あり、其他の大都市に於て生れたる學者は二千七百五十七人其他の地方に於ては僅に千二百九十四人にして巴里の一市にだも及ばず。故に若佛國全體が巴里と同一の比例を以て學者を生ずとせば實際數六千三百八十二人の代に五萬三千六百四十人なりしなるべく、又其他の大都市の比例にすれば二萬二千六十人なりしなるべし。又反對に佛國全體が地方と同一の産出力を有せりとすれば佛國學者の數は僅に千五百廿三人のみとなりしならん。調査の結果此の如くなるに都市に人物を生ぜずとは一般に信ぜらるゝ所にしてバジヨットは『都市の如き疲瘠せる土地に偉人を生ずること稀なり』と云ひリヒテルは『詩人は首都に生れず』と叫びギッデンクス氏は其著社會學原理に『天才が都市に生るゝと少し』と主張し、我國に於ても『靈山大澤偉人を生ず』などゝ云ひて人物は寒地の特有物なるが如く信ぜらるゝは不思議なりと云ふべし。思ふに是は都市が智を研き德を積み事を成し名を揚ぐるの機に富める割合には人物少く、地方人士は是等の機會を捉ふること難き割合に成功するもの多きが爲に其實數に於ても地方に人物多き樣に思はれたる爲ならんか。今此處に急速に確定したる統計を作ることを得ずと雖も、都市の人口に對する都市出生の學者の比例數と、地方人口に對する都市出生の學者の比例數とを比較すれば、後者は前者に勝ること遙なるらるゝに至れる地方人士の比例數とを比較すれば、後者は前者に勝ること遙なるべし、是れは笈を負ふて都會に出づる學生、志を抱て鄕關を辭する青年等は大抵多少の志を有し、元氣と才氣に盈ちたるものなるべければなり。去ればロンブロソー及ラヌチの如きは『天才の多數は地方に生れて都市に死す』と云へり。又一般に體質上の比較より云へば地方人は概して都人士に優るが如し、ギッデングス氏の如きも『中流以上の農民卽ち有福なる田舍民にして自己の所有地を耕作するものは最も高き生活力を有する階級(Vitality Class)にして主として社會の體力を支持し其生長を確定ならしむるものなり、之に屬する强壯精悍の有爲者は踵を接して都會の地に來集し成は實業界に雄飛を試みんとし或は學術法律等學識を要する業

務に從事して成功を收めんとしつゝあり。都市の住民にも此階級に屬するもの亦多しと雖も之を地方地主農民の大多數なるに比すれば僅に九牛の一毛に過ぎず』とて都會は田舍人に依りて人物を供給せられて其繁盛を維持するものなることを論定したり。

然るに統計上都會生れの者に學者多く、地方生れの者に少きは何故なりや。是固より先に云へるが如く都會は人口密集して社會的の勢力甚強く又種々雜多の機會に遭遇し易く個人が自己の人格を淘冶するに最も好都合なるが故ならずんばあらず、都市に生れたるものは其生活力の度に於て田舍漢に及ぶこと能はずとするも教育上社會上學術上政治上自己發展の機會を得ること甚多く、結局苟も其資質あるものは殆んど悉く向上の機會を捉ふる事を得べく、田舍に生れたるものは其資質あるものと雖も之を發達せしむる機會を逸し所謂驥足をのぶること能はずして空しく櫪櫪に伏して老死するもの多きが爲なるべし。

抑も人格の發展なるものは決して單獨にして實現せらるべきものにあらず、如何に大なる天禀の才ありと雖も他より之を養ひ之を刺戟し之を教育するにあらず

んば是畢竟研かざる碧にして瓦礫と擇ぶ所なからん。人口密集の地は人と人と相接する機會多く隨て人格養成の目的を達し易し、是れ都會に人物多き所以なり。然れども都會に人物多き眞原因は都會生活其者にあらず。只都會生活が供給する所の機會卽ち人間交通の便宜に歸すべきものなるを以て縱しや水道の水で產湯を使ひ大阪天滿の眞中で產聲をあげたるものと云へども、都市が供給する機會を捕ふることを知らず漫然として日を過さば孤島の中に一生を終るものと同じく少しも得る所なかるべし。結局人格の養成は外來の刺戟に待つ所甚多しと雖も必ず自己の努力が之に伴ふことを要す故に都市生活は決して人物發生に缺くべからざる條件にあらず、心此處に在らざれば見れども見えず聞けども聞えず。山に入て薪を見ざるものすらあり、去れば志なき者は如何に知識の叢園に在りとも自ら其外圍の勢力を攝取すること能はず寶の山に入りて手を空くして歸るものゝ如くならんのみ。社會未だ開けず、交通に不便多く往來に障礙多き時代に在りては人間相互の感化は必ず直接に其言語擧動によりてのみ交換せられ隨て人間の直接的近接は人格研磋上必要の條件なりしならんも、今や人爲の機關は非常に

進歩して人と人との距離を短縮せしめ「酒屋に三里豆腐屋に五里」の山里も學校郵便新聞鐵道等の力によりて遠隔の社會にも容易に交通することを得るに至り精神的距離は日々接近しつゝあり。去れば昔日否今日も幾分か都市生活の特權たる人格修養の好機會は漸次地方にも均等に分配せらるゝの日あるべく又今日と雖も田舍生活をなすもの自己の努力により新聞雜誌書籍手簡其他あらゆる方法を利用して社會の刺戟を受け多數の人と精神的に交通することを勉めんには地方の自然的不利益を償ひ得て其結果心なき都人士に打勝つこと敢て難きにあらざるべし。

以上再び西洋學者の統計を藉り社會の勢力人間の努力の人物發生に如何に有効にして一國の隆興一身の成功は自然的條件よりも人爲的勢力に據る所多きを論せり。猶日本に於ける都市と田舍との人物發生に關する統計を製し深く之を研究せば多大の利益と興味とを發見し得べしと雖も、今爰に之を示すことを得ざるは余の大に遺憾とする所更に機會を見て再説する所あらんとす。

上總介忠輝

(伊達政宗海外遣使に關する疑問)

阿部秀助

Psychologisch liesse sich das Ereigniss auf diese Weise am besten Verstehen. Aber die Ueberlieferung ist doch nicht so gut bezeugt, dass sie sich historisch behaupten liesse. Mich deucht: ein Dichter könnte sie ergreifen, denn darin liegt ein Vortheil der poetischen Darstellung, dass sie auch eine minder begründete Ueberlieferung annehmen und derselben folgend die Tiefen des Gemüthes erschliessen kann, jene Abgründe, in denen die Stürme der Leidenschaften toben, und die Handlungen geboren werden, welche den Gesetzen und der Sittlichkeit Hohn sprechen, und doch in der Menschenseele tiefe Wurzeln haben. Die Information, auf welche eine historische Darstellung angewiesen ist, reichen nicht so weit: in unseren Falle lassen sie es bei gewissenhafter Prüfung zu einer bestimmten Ueberzeugung ueber den Grad der Theilnahme nicht kommen. Nur daran kann kein Zweifein sein, dass auch diesmal Ehrgeiz und Machtbegier ein grosse Rolle spielten. L. V. Ranke's sämmtliche Werke, BXIV e. 269.

一

慶長十八年九月十五日奥州仙臺の藩主伊達政宗が其臣支倉六右衛門及びサンフ